

第8編～第11編

ジャラモギ オギンガ オデインガの英雄的生涯

(ケニア近代政治史に見る、あるルオー族の指導者の足跡)

今年2003年は、ケニアの独立の年1963年以来40周年にあたる。

ある文章に、ケニアの2大部族であるキクユ (Kikuyu) とルオー (Ruo) の政治的協力が土台にあったから、ケニアは比較的平和のうちに独立を果たし、その後の政権の安定が継続したとの見方を読んだことがある。無論1963年の独立にいたるまでに キクユ族とその周辺部族 (エンブ族やメル族) を主力とするマウマウ団の激しいゲリラ運動があり、これを弾圧するためにイギリスが派遣した正規軍の空軍攻撃を含む平定作戦の前に多数の死傷者を出し、逮捕者29000人、投降者2700人を数え、政府側の損害も、欧州人の死者95人、アジア人の死者29人、アフリカ人の死者1920人、負傷者2385人となっている。この「マウマウ団の反乱」は、やがてイギリスの植民地政策転換を齎した。

去る3月末キスムを訪問する機会を得たが、この時ルオー族の政治家の話しを耳にし、**オギンガ オデインガ(Oginga Odinga)**の生涯をたどってみる気になった。彼の伝記を読みすすめる中で、植民地支配下にあったルオー族の若者が、いかにして政治に目覚め、植民地支配を打破し独立を達成する運動に身を投じていき、愛国者になっていったのかを知ることにもなった。

特に、1957年の選挙で選出された8人のアフリカ人議員の一人となって以降は、議会闘争の中心人物として活躍し、「マウマウの首謀者」とされて監禁され、名をよぶことさえはばかれた **KAU** ((ケニア=アフリカ人同盟) の指導者達を「いまだ、我々の指導者である」と宣言し、ケニアッタを飽くまでも支持する意志を表明して、欧州人入植者やケニア政府官吏の心胆を寒からしめる下りは痛快であった。

さて、ケニアの歴史を作ったといわれる英雄は沢山いるが、2大部族の同盟と多党制民主主義を一貫して擁護したルオー族の**オギンガ オデインガ (Oginga Odinga)** の伝説的働きも記憶されるべきだろう。彼は、後にルオー族の崇拝する民族の先祖の一人に因んで**ジャラモギ (Jaramogi)** と呼ばれるようになる。

オリジナル文献：

Makers of Kenya's History : "Jaramogi Oginga Odinga"

(by E.S.Atieno Odhiambo/ Series Editor:Prf. Simiyu Wandibba)

第8編 最初の抵抗

(ジャラモギ オギンガ オデインガの英雄的生涯 そのI)

(1) 形成期、エリートの誕生 1911－1940

20世紀の初めには、ルオー族といっても、36の支族(sub-nations)に分かれており、更にその支族は、多数の氏族(Clans)に分かれていた。(脚注参照)

この伝記の主人公であるアジュマ オギンガ オデインガが生まれたのは1911年で、サクワ 支族の ニヤミラ カンゴという土地であった。彼の血統のカウオラは、コワク氏族に属していた。彼の父は、オデインガで、彼の母は、ウヨマ支族のカグワ氏族の出身でオポンド ニャル マゴロと呼ばれた。父母は彼にアジュマ (Ajuma) と名をつけ、更に家族の先祖にちなんでオギンガ (Oginga) の名を贈った。

サクワ 地方は、1899年に、イギリスに植民地化されたばかりだった。彼の幼児期の思い出では、特に1918-1919年の出来事を忘れられない。それは、イギリスが、其の統治の枠組みを示した期間であった。行政機関は、彼らのコミュニティーと氏族を支配するために先ずチーフと頭を夫々任命した。更に人頭家屋税を人々に課した。又新しいやり方、例えば 西洋服、人には天然痘や牛には牛疫の予防接種、伝道式キリスト教や洗礼名、輸送の手段としての自転車、仕事と特権の言語としてのキスワヒリ語と英語などの新しい文化を紹介した。だから、オギンガは、二つの文化世界で大きくなったといえる。彼は、片手でルオー文化を学び、部族の知恵、伝承、歌謡、家族主義を基本に置いたルオー族の組織化された社会構成、村落民主主義、相互の社会的責任について学んだが、もう一つの手では、彼はお決まりの西洋市民社会 (イギリス式) の生活様式を学ぶことになった。

彼の出会った「新しい物」としての最初の場所は、教会と小学校が一緒になったブッシュ スクールであった。1926年に、15歳のオギンガはマランダ スクールに進学した。家から4キロの距離にあり、費用は彼の兄のアルバート アドールが支払ってくれた。彼は、この「相互の社会的責任」という事を兄から学ぶことになった。マランダの校長は、シャドラック オセウエで、オギンガは「訓練と努力の尊さ」を彼から学び、後々までも忘れなかった。オギンガは賢い生徒で、常にクラスのトップであったので、1929年には、容易にマセノ スクールの入学試験を突破した。

この学校は、一級の伝道を目的とした学校で、カーレイ フランシスという数学者に指導され、勉強と祈りだけで、労働は一切なかった。其の教師は、生徒たちに「出自の環境を忘れるな」と教えた。彼は教師に親しく接し、イギリス人の驚くべき性格を仔細に学ぶ

ことになった。その結果、彼は教師の「アフリカ人に対する神父としての態度」に批判の目を向けるようになった。というのは、この教師の心の中に、「どんな優れたアフリカ人も、白人には劣る」という奇妙な信念があることを見抜いたからだった。この教師は、数学でも一つの方法（自分の解き方）しか、認めなかったが、彼は自分で他の解き方を見つけ出すようになった。彼は、この学校で多くの隣接部族の友人たちに恵まれた。彼は、後になってもマセノで培ったアバグシやアバルイヤの友人たちとの交友を思い出した。また、彼の社会奉仕活動の出発もまた、このマセノ学校からであった。日曜学校に出席し、友人たちと近所の小学校のためにコーラスを歌った。休暇の時には、学生組合を作り、生徒たちに影響を与えた。この生徒たちは、後にルオー族のエリートに育つ子供達だった。

彼は1934年に合同高等学校に入るために、上級の基礎試験を好成績で突破したにもかかわらず、カレイ フランシスは、一種の宗教的且つ父親的干渉の典型だが、「オギンガは既に十分すぎるほど教育を受けているので、初等学校に行って教えるべきだ」という決定を下した。オギンガはこれこそイギリス人がアフリカ人の生活と人生を支配する権利の乱用であると捕らえフランシスに対して公然と反抗した。「押し付けがましく」、フランシスは「キクユに行き、合同高等学校にはいることを許した」と後にオギンガは回想している。そこで彼は多くのケニアの学生と出会い、友情を育む機会を得た。彼の教師の一人にジェームス ギチュル（後に KAU 設立の中心人物のひとりとなった）がいた。彼は、驚くことにオギンガとほぼ同じ年齢であったが、その学力は卓越していた。学問的な意欲に突き動かされて、オギンガは勉強し、2年後にマケレレの入学試験を受けるまでになった。彼はクラスのトップで、キマニ ムブチア（後に医者となった）と共にマケレレに進んだ。マケレレは、東アフリカで高い教育への登竜門であった。この学校は1937年に大学のステイタスを取得している。こうして、彼はケニアのエリートの道を歩き始めた。

彼は、マケレレで全東アフリカから集まって来たエリート的なアフリカ人たちと会うことになる。彼は努力して勉強し、コーラスで歌い、宗教について厳しい考察をし、ついに伝道のためのキリスト教はアフリカの文化を貶めることになるとの結論に達する。

1930年代はケニアやウガンダの文化的興奮の歳月でもあった。彼は其の興奮を浴びた1人だった。彼はマケレレ時代に、学問に目覚め、設備の整った理科実験室に没頭し、彼の学力は再び開花することになった。彼は同時に「数学の星」的な学生でもあった。欧州戦争が迫ってきていたので、彼のクラスは5年を3年に短縮せざるをえなかった。1938年のケンブリッジ スクールの証明試験では、彼はクラスで2番目の成績であった。彼は、この間の最後の年を「教師の資格免状」を取るべく猛然と勉強した。こうして彼は、其の頃のケニアにとって、一握りの「卒業免状を持ったアフリカ人」の仲間に加わるようになった。其の時代といえ、ピーター ムビユ コイナンジだけがアメリカ合衆国から2つの

資格を取っていたし、後の初代大統領になるジョモ ケニアッタだけがロンドン大学の大学院の卒業免状を持っていたに過ぎなかった。そんな時代にあって、マケレレの卒業生達はアフリカ人のエリートであったし、ウガンダ、ケニア、タンガニーカ、ザンジバールの1950年代の自由（Uhuru）の為の政治闘争の背骨となる運命を背負っていた。

（脚注）ルオー族を構成する支族：

Alego, Ugenya, Gem, Sakwa, Asembo, Uyoma, Seme, Kisumo, Kajulu, Kano, Nyakach, Yimbo-Kadimo, Karachuonyo, Kasipul, Kabondo, Kochia, Kadem, Kagan, Kwabwai, Kamagambo 等

支族を構成する氏族（Clans）の例：

Sakwa 支族は Kowak, Kapiyo, Karabuor, Kachuje, Wayendhe, Kakuodi, Kolaka, Wagalu, Kamnara, Wawayi, Kamayuje, Kamlwang 等。

（2）抵抗と改革、1940－1956

第二次世界大戦は、ケニアにおける植民地政策に歴史的転換を齎した。多くのケニアの若者が、イタリアと戦う為にエチオピアに、日本と戦う為にアジアに出征した。エチオピアのゴンダ、パレスチナのエルサレム、そしてビルマ（現在のミャンマー）は、ビルダッド、カギアやジャクソン、ムリンガのような歴戦の兵にとって、最高の戦争の舞台であった。世界中から集められていた植民地の兵にとって、この戦争は「愛国心」を創造する場ともなった。しかし、ケニアの兵たちが帰国すると、彼らの血が「自由」の為に注がれたにもかかわらず、彼らの故郷、「植民地」は何も変わっていないことを知らされた。彼らの何人かは他の愛国勢力に加わって、独立闘争の速度を上げようとした。カギアやポール、エンゲイは、これらの愛国的退役軍人のグループの中にはいり、激しく活動した。

この伝記の主人公であるオギンガ オデインガは、1940年に、数学とスポーツの教師としてマセノ中等学校に赴任した。彼は、ここで、たちまち植民地主義と人種差別によって作り出された「壁」にぶつかる事になった。何人かのアフリカ人教師たちが、マケレレにも居たが、植民地政府は、彼らに、給料を、欧州出身の同僚教師の5分の1しか支払っていなかった。彼らの住居は劣悪であった。この新任のアフリカ人教師は、「オデインガ先生」とは呼ばれず、彼のクリスチャン名である「アドニジャ先生」の名で知られる事になった。学校の経営についても、意見すら述べることを許されなかった。マセノの白人教師はオデインガに服装まで指示しようとした。オデインガに自分の服もネクタイも持たせないで、ただ植民地主義者がアフリカ人のためにデザインしたカーキ色の制服を着せようとしたのである。

オデインガは、初めからこれら全てに反抗した。彼は、同時代人がやったように、この労働条件に反対を唱える決心をした。彼は、自分に忠実になろうと決心した。そして彼の心を植民地主義から解放する事に決めた。つまり、彼は、「欧州の権威にアフリカが屈服する」という考えを基本に置いた植民地的権威を拒否する事を決めたのだ。この「決心」は、改革を呼び覚まし、イギリスの見方ではない「新しい世界観」を創造する事になった。この「決心」は、彼自身の自由獲得の願いも含んでいた。彼は自分で選んだものを食べ、生活し、自分の選んだ物を着る事に務めた。そして自らのアイデンティティー（主体性）を持って「選択する自由」を大切にした。こうした戦いを通じて、彼は、やがて「アドニジャ先生」ではなく、「アジュメ オギンガ オデインガ先生」と呼ばれるようになった。彼が妻のマリー ンゴンガと家庭を持ち、子供を持ったときに、子供の為に教会で洗礼を受けるが、名前にアフリカ名をつけることを主張した。1945年の事である。オブル オデインガ、ライラ アモロ オデインガ そして エンジレ アゴラ オギンガである。

心と体は、解放したけれども、オデインガにとって尚大変な仕事量が待っていた。5年間、彼はマセノ中等学校 とマセノ獣医学校で連続的に教壇に立った。彼は、やがて、絶え間なく「白い手の権威」に対して頭を叩きつけている自分に気が付く。彼の白人の同僚の態度は、(当時は当たり前な事だが)、オデインガのように教育のあるアフリカ人でも「白人に劣る」というものだった。彼らの中には、オデインガに向かって「アフリカ人は、12歳の白人の子供程度の頭しかないのだ」という者もいた。彼らは、「アフリカ人に学問的な課題を教えるべきではない」とし、繰り返し自覚を喚起するように、はっきりいって筋肉労働者に対するように、教えるべきだと主張していた。つまり、「欧州人は2000年を掛けて市民社会を作ってきたのだから、アフリカ人も同じ時間だけ、待たなければならない」というのだった。そして結局、アフリカ人は、ほんの基本的な段階から一世代進んだに過ぎないので、自己表現には欧州人の力を必要としていると思い込んでいた。だから、1944年に、ケニアの立法審議会にはじめて、アフリカ人議員の一議席が設けられることになり、エリウド マツウ（オックスフォード大学の卒業）が、アフリカ人利益代表に指名された時に、マセノの白人の校長はオデインガに直接尋ねたものだった。

“マツウは一体何を知っているのかね？ マツウは議会に一体何をしに行くのかね？”と。

オデインガは、自分が「殖民と伝道の旗を掲げた植民地政府、入植者、白人宣教」の作り出している「世界」の真っ只中に生活している事に気付かされることになった。そこは「アフリカ人の声も権威もない世界」であった。そこは教育のあるアフリカ人ですら人間としての尊厳も自由も認められていない世界であった。そこには、植民地主義を受け入れ、馴れる事でそれと同居しようとしている何人かのアフリカ人が居るに過ぎなかった。彼らは所謂“協調者”と呼ばれていた。他のアフリカ人は、悉く、白人のパトロンを拒絶していたので、“反抗者”と呼ばれていた。オゴット教授は、オギンガ オデインガの生涯を「生

涯の反抗者」として描いている。1940年から1945年の間のマセノこそ、この「反抗」が始まったところであった。

1945年から1956年に架けて、オデインガは、植民地世界に、「ある新しい律動」を創造し始めた。

1945年までに、彼は、「白い手のパトロン」達の下では、もはや生活しないことを決めていた。そしてマセノの教師の職を返上し、経済的かつ社会的独立を迫り始めた。まずビジネスによる独立を求めた。彼は、1945年に他の4人の仲間と共に、故郷で、ボンドスリフト会という小さな銀行会社を立ち上げた。其の時の彼らの見方は、「ホワイトハイランドにある大農場、産業と商業、そして銀行などの植民地的経済の全てのおいしい特権から、アフリカ人は排除されており、欧州人とアジア人だけが、それらのすべてのおいしいビジネスを支配している」というものだった。

アフリカ人は、土地も資本すらも、持っていないのに、欧州人はアフリカ人の労働力までも支配している。オデインガの目標は、「自力更生」を实践し、この白人の独占体制を破る事だった。1946年に、この組織の名前は、ルオー スリフト アンド トレーディング社 (LUTATCO)と改められた。そして株式は、全アフリカ人に開放された。1800人以上の人々が1947年から1957年の間に、一株20シリングの株式を購入した。オデインガは、この新組織の会長に就任した。そして次の10年の間、彼は東アフリカの主要な町を歩いて、人々に、この組織への参加を促した。

LUTATCO は、圧倒的にルオーの会社であった。そして短期間に資産を獲得し、目覚ましい発展を遂げた。1956年から1957年の間に、キスムに、2つの大きな都会型の建物を建築した。ラモギ ハウス とアフリカ ハウスである。更にエンギヤ、ボンド、そしてドデーにトウモロコシの粗引き工場を建てた。獣の皮類と共に食料類や魚類を取引した。マセノにマセノ店を開店した。これらの成果は、自分達の持つ財政的な力のみで獲得した成果であった。1947年からは、ナイロビに新聞 (ラモギ プレス)を所有することになった。これは1948年にキスムに移されたが、其の時代のアフリカ人の為の主要な新聞紙誌としてラモギ、ニャンザタイムズ、ムリナヴォーシ、ラジオポスタ、サウテイアムワフリカ、ムメンイエレリ などの各紙を発行し続けた。

活動の第二段階でオデインガは、「ルオー組合」(都市に住む都会型のルオー族のための社会福祉の組織)を設立した。一方、1920年代から、こうしたルオー族の労働者のために、ナクル、ナイロビ、モンバサ、カンパラ、ダルエスサラムに、色々な「団体」(氏族単位や地方単位が軸となっていた)が活動するようになっていた。1940年代までの、

これらの「団体」の主な役割といえば、「求職者達を受け入れる事」、「親近者の埋葬を組織する事」、「売春に従事しているルオー族の女の社会復帰」、「蹴球試合、舞踊、お茶会、講演会を組織する事」などであった。これらの雑多な「団体」が、オデインガの口利きで、1953年に「ガラモロ ルオー組合(東アフリカ)」として大合同を果たすことになった。オデインガは、この組合の「世話役」となった。この組合は、故郷を離れて暮らすルオーの人々にルオーの人々の声を聞かせ、故郷でのイベントに彼らを連動させた。

ルオー組合でのオデインガの役割は、二つの初期の事件に密接に関与していた事に象徴される。初めの事件とは、1954年に、ナイロビの議員のアムブロズ オファファ (Ambrose Ofafa) が、カロレニでマウマウ団の戦士によって暗殺された事件であった。オファファは、アレゴ支族のルオーであったが、(植民地主義の)“協調者”と疑われた為に暗殺されたのだ。イギリスはすばやく反応し、「ルオー族は、ギグユ保護区を襲い、ギグユ族に復讐するに違いない」と触れ回った。しかし、オデインガは、直ぐにキスムからナイロビに飛び、カロレニとカリアコーで何度も会談を開き、このイギリスの宣伝をつぶした。かわりに彼は、マウマウ団の戦いの原因について理解するようにルオー族を諭し、ルオーとギグユの競争心を掻き立てないように説得した。

二つ目の事件というのは、オデインガが、このオファファの死を良い方に使ったことを指していた。彼は、ルオー族に対して「オファファの名前でアフリカの同胞を殺すのではなく、彼の記念塔を建てるべきだ」と促したのだ。その結果、1954年から1957年の間に、資金を集める大きなキャンペーンが起こった。ルオー族の人々はどこでも誰でも喜んで寄付をし、オデインガは、東アフリカの主要な都市を全て行脚することになった。この運動の結果、1957年にキスムに「オファファ記念会館」が完成することになった。この建物は現在「ルオー組合本部」となっている。

1950年代の初めまでに、「経済的な独立と倫理的主体性のチャンピオン」として、オデインガを、将来「ルオー族の優れた指導者になるかもしれない人物」と見なす動きが始まった。彼の崇拝者たちが、ルオー族の崇拝する「民族の先祖」の一人 (Luo, Nyaluo Ramogi, Ajwang) に因んで、彼を、「ジャラモギ (Jaramogi)」と呼ぶようになったのはこの頃からである。こうして、オデインガは、1957年に立法議会の議員となるまでに、アギグユに次ぐ大きな民族グループであるルオー集団の心を掴むことに成功していた。そして、都会の労働者のリーダーとして頭角を現しつつあったトム ムボヤやアーグウイン グ コドヘックと同様に、時代の変化の舞台に、じりじりとせり出していったのである。

(次号に続く)